彩画職人部類

特別
ヲ1
1319

門 ヲ 1319
編 巻

職人部類序

島田文庫

職人部類序

夫有百工而天下之用足矣
功大哉而家家異物人人
事其所治不盡可識其
不悉可測世往往有々
探其秘以著書是以世
所計大率可知雖然書

玉樹軒藏版江戸
彫刻 職人部類
書 荻生惟中
大沢弘道 校

彩匠職人部類下

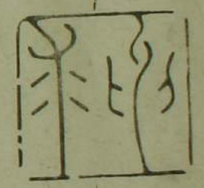
鼎折、琴師、面打
弟子、土器師、琴持
鞠師、紙工、絃師、笠多良
傘張、漆切、針師、
紙彫、

序の後に
父子孫之
其所計
多能者
其所治
書不盡

言故其所爲則非家至而親
見之焉得識人人亦自有所
業何暇家至而親覓之於是
橘生圖百工之所爲以編一
書欲以使知其所爲名曰職
人部類觀其所摸寫可謂至
傳神之奥窮寫真之妙也若

夫貴家高官之人難以知於
百工之所勞苦披此編一觀
則當足不家至而見其諸態
耳豈徒丹青歡目乎哉學者
幸以爲格物之一助則此
之功不亦多乎
明和七庚寅歳十一月望

邏沙窟龜求撰



職人部類序

世乃ちの免亡觴をうつる江乃流上筆を
ちき百乃工れ弓をうつく梓ら作る
その子れ箕を作くるる免ちるる一七かくる
ちる丙丁童子れ免る奪ゆれ不乃ちこ
乃老画師も今ハれの子れ底ら江人乃
数千さへ入めるを玄くく市山るる

うつゝなのはくしく花さく春は桜木
はちりもるるはちりぬよりてれ乃
こゝろを冠師よりかゝしめく硯乃海
は棹さゝ付るかゝゝれもゝ絵を
きゝ付るあちゝ
天明四のゝ甲辰はゝ春
四方赤石

彩画職人部類 上

冠師　大工
鍛冶　具足師
糸組　元結扱
浮師　紙漉
籠作　鞠師
鞠屋　清子吹

冠（カムリ）

抑も冠の
濫觴（ハシ）を
人皇第四の帝
懿德天皇て代人の
三冠を制さる
其後て武の帝の
此時よりて男女
ともに先て髮をゆひ
是より漆塗の冠紙用ひ
ゆく

禮儀定り今の紗冠烏帽子も
ちるる部分ちりよ又文武帝の
時より額髮額遠新と
制を遠ひ生頂より織月の
ごく羅をもて張り世よ
月額もいつ十五歳以上の
者より壮年と淺させんうと
諸ゆとかこくも若き代のおん
めくゝ作くも悪あり百官儀し
ゝゝ色をいつゝく
烏帽子い影ふ義ちよ
いしは子中小も用折ふ
五五中將業平と
けゝ先ちらよ

鏡

唐土
知らぬ我朝
にて二種の
神宝宝祚
連綿として
国体所の新造
後島羽院
御製あり
世の社のまもる
鏡と称あり
また倭国の
宝ふる婦人
第一分さしあたりの奥かしく
侍者の嬬屋のかがり衣くの
姿鏡

いつ頃何ものかこれをもむ
古書に曰むし女婦のものの
りかをおとたまをその女を
国とをさめ芳郎は婦人
まふせ別なる別をうかし
朝夕を別なる鏡を出して
見とはるるあるこの此つれる
今をもむるとと驚ふ
常陸にも婦人
婦しらを婦もの
なるたとつをれるもの
日ふ諸くつ
代の人と変る時ふ生鏡
鶴と化しくそのまの
いふ原まを婦の
仇心を初る鏡のこふ
かをくをとうるものを
此鏡をりして

工匠

日本紀神武天皇元年
經始帝宅於橿原宮此
時天明日命掌工匠

莊子云郢人堊漫其鼻
端若蠅翼使匠石斲之
運斤成風盡堊而不傷

甲（ヨロイ）

甲ハ釋名ニ云
似リ物ノ之有ニ鱗甲一
始テ作ルヲ之人ノ異說
多シ

續日本紀ニ云
光仁天皇寶龜
十一年八月勅
今革之為甲

俗呼甲ヲ稱具足ト
蓋此六具滿足ノ
之通稱耳

小とものくゆつる撰元結
ちりしをみみせりもゆひ
紙の名なりと
いつはふ
詳さしく

撰元結と
麦とろ麦のち
寛文のころ紙こより紙撰と
長く結く小よりなく
車あく結とうけく

應神天皇三十七年
の春阿知使主都加
使主と呉國よりつれ
て縫工女とをとめ
兄媛弟媛呉織穴織
四人の婦来たり
たまふ

金襴唐織ハ
京の西陳那氏
信屋仰の糸を織出
るものなり

紙

聖徳太子
唐土より
来り
墨徴と
いへる
ものと
工夫あり
しめし給と
傳る也
得給ふ

おしなべて代々おしなべつり
国々の名産檀紙奉書と
上品とする
ふいなる
ふし
糸都ハ紙屋川の流
あり生紙とふを
糸都ハ麻布関口武ハ
ケヤ山谷の神麓の
何しかく休しき
紙ハ雪晒と
つるめ遠き
ことなる
名あり

鉤簾（ミス）

又

翠簾

風雅集

雨晴て
風そおろく
吹いれて
こゝの宮
匂ふ
軒の梅の元

永福門院
内侍

三才圖會云
鞦以皮革為之
隨弓弩及箭大
小長短用之

籠（カゴ）

竹を和名
かごく
唐土にも
籃（カタミ）とも
稗殼をく
農業の具
あるひも
家飾の具なり
後河は生所竹
ゆゑにこれを

文業をもちゐるもの
おのづから集所
摂州有馬よ
又産所
花菖蒲葉筋を
ちゐめ作り
玉ぬきなり
和土をふを
世尓名産とす

鞠（こり）

鞠は
黄帝
作りしめ
給ふし
中期つる
空極玉宝
の付
給ふ先て
つくる
世帝なれハ
芝と競ひ
給ふなり

文武帝
大宝元辛
給ふ蹴鞠
あり
あり
後白河院芝を
賞し給ふ
流鳥井中納言雅経卿
此道を達し給ふ
世々蹴鞠の師範たる
庶流つゝき
雅波家あり 高家と
なつて世ふ作る所なり

文木集より　芝園

花のもとにたちよりて
なつかしみ
なつかしみ

硝子（ヒイトロ）

中和のものなり
外國より出るなり
あるも人拵出るなり
其製りなりなる為なり
中興長崎ふ是を製するなり
こなるなるなる花洛坂阪より伝へ
て業をふるものなり
東都よりも殖行なり品数数多
其物の物数の数四
中こなるふの法おさなる
なるの代の徳化温もうるふ
外國より産するものなるも
ふりふる始業なる
なるなるなる聖代ふるるや

天明四年甲辰正月吉日

再刻

東都書肆

下谷池之端仲町

植村藤六

[illegible]

中上書

岡鳳藏